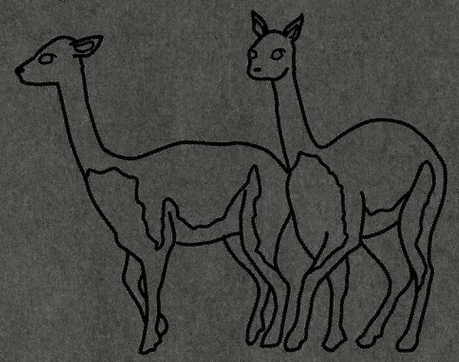
生きもの博物誌

【ビクーニャ】
南米・アンデス山脈



ビクーニャの保護と村おこし

大山 修一
（おおやま しゅういち）

首都大学東京 助教

高価な毛と乱獲

アンデス山脈にはリャマとアルパカという家畜が飼育されているが、近縁の野生動物ビクーニャとグアナコが生息する。ビクーニャは三八〇〇メートル以上の高地草原に生息し、分布域はペルー北・中部からボリビア、アルゼンチン、チリ北部の山岳域である。ビクーニャの毛は直径一三～一四ミクロンであり、アルパカ（二二ミクロン）、リャマ（二六ミクロン）、グアナコ（一八～二二ミクロン）と比較しても繊細である。二〇〇六年の時点では、一キログラムのアルパカ毛が五ドルほどであるのに対して、ビクーニャ毛は約五〇〇ドルで買い取られていた。

インカ時代には、大規模な集団猟によってビクーニャは生け捕りにされ、毛刈りされたのち、野に解放された。こうした狩りは、その場所を変えながら、各地区で四年ごとにおこなわれ、毛質の維持と個体数の増加が図られた。ビクーニャ毛はすべてインカ王に献上され、王がその一部を王族にわけ与えた。庶民はビクーニャ毛を身につけることは許されず、この禁を破れば、死罪に処された。スペイン人が到来する以前である一五〇〇年ころの推定頭数は二〇〇万頭である。その後、乱獲により生息頭数が減少し続け、一九六五年にはペルー国内で六〇〇〇頭にまで減少した。

住民主体の保護活動

ビクーニャを保護するため、ペルー政府は一九六七年に国立自然保護区を設定した。しかし、ビクーニャの毛は高額で取引され、密猟にさらされる危険性があった。ドイツの援助を受け、保護区では密猟を防ぐために、武装警備隊が組織された。このような保護システムによって保護区の頭数は一九六九年に二六四七頭だったのが、一九八〇年には一万八三三五頭へと増加している。しかし、周辺住民の家畜を強制的に保護区から追い出そうとしたため、住民と政府の関係は悪化し、一九八一年にはドイツの援助も停止した。さらに、一九八三～一九八九年にはテロ活動が活発になり、保護区の管理は完全に放棄された。

政府当局者たちは、武装警備隊によって広大な地域をカバーすることは不可能であることを認識し、住民主体によるビクーニャの保護と利用が考え出された。一九九〇年代に入って治安が回復すると、保護区の周辺村はレンジャーの組織化を進めるとともに、毎年六～九月には一〇～三〇回ほどの集団猟を実施している。多くの村びとが集団猟に参加し、ビクーニャの毛を刈り取っている。一頭から刈り取られる毛は一〇〇～二五〇グラムである。ビクーニャは、毛刈りののち、ふたたび野に放される。わたしの調査村では毎年、一五〇キログラム以上の毛が販売され、その売上金は村の裁量でレンジャーの給与、集団猟の参加者への日当、ビクーニャ保護のためのインフラ整備、村びとの生活向上にあてられる。

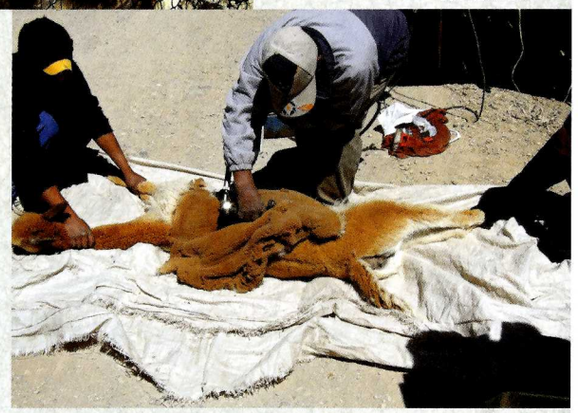
保護区ではビクーニャの生息頭数が過剰になり、草地への負荷が大きくなってきたため、ペルー政府の指導のもとでアンデスの村むらへ移送されている。一九七九～二〇〇〇年までに移送された頭数は二七五〇頭におよび、ペルー国内では一一万九〇〇〇頭（二〇〇〇年）にまで回復している。現地住民によるビクーニャの保護、集団猟と毛の販売が、貧困と過疎にあえぐアンデス農村の村おこしにどのようにつながるのか、注意深く見守っていきたい。

ビクーニャの群れ

集団猟。カラフルなビニールがついた紐をもち、横列になってビクーニャを追い込んでいく

生け捕りにされたビクーニャ

電気バリカンによる毛刈り。その後、ビクーニャはふたたび野に放たれる



ビクーニャを保護するレンジャー。密猟者とのあいだで銃撃戦になることもあり、ライフルと拳銃、双眼鏡は必携である

ビクーニャ（学名：*Vicugna vicugna*）

ラクダ科。体重30～45キログラム、体長80～110センチメートル。南米のラクダ科動物4種のうち、体がもっとも小さい。遺伝学的な研究により、アルパカ（*L.pacos*）はビクーニャと、リャマ（*L.glama*）はグアナコ（*Lama. guanicoe*）と、それぞれ近縁性が高いことが明らかになっている。学名は*Lama vicugna*と記されることもある。ワシントン条約では附属書IIに分類され、商業取引には輸出国の許可が必要である。インターネットでは、ビクーニャの毛で織られたスカーフが25万円、毛布が315万円で販売されている（2007年現在）。